

**第5回北海道集落総合対策事業幌加内町（母子里地区）地域協議会  
母子里地区地域づくり協議会（議事要旨）**

■開催日時

平成26年3月19日（水） 18:00～21:00

■開催場所

幌加内町母子里コミュニティセンター研修室

■出席委員等

<委員>

多田会長、橋本委員、日野委員、若山委員、岡本委員、小野田委員

<アドバイザー>

旭川大学保健福祉学部 大野准教授  
NPO法人「よるべさ」 蔵前代表

<事務局(北海道)>

総合政策部地域づくり支援局地域政策課  
西田主幹、田中主査  
上川総合振興局地域政策部地域政策課  
大西主任

■開催概要

1 挨拶

**西田主幹**：昨年6月に1回目の協議会を開催して以降、本日の会議で5回目を数え、本年度における最後の開催となる。本日の会議では、これまでの間に、各委員の皆様や住民の方々からいただいたご意見などを踏まえてまとめた「母子里地区の将来に向けて（中間まとめ）案」を中心にご意見をいただきたいと考えている。このあとの進行は、多田会長にお願いしたい。

**多田会長**：昨日までは悪天候が続いたが、本日は天候にも恵まれて良かった。本日の会議では、これまでの間に、各委員の皆様のご意見や旭川大学に実施していただいた住民の方々への聞き取り調査の結果を踏まえながら、この母子里地区の課題やめざす姿、今後の取組の方向性などを、項目ごとに整理し、来年度以降の具体的な取組に繋げていくための中間的な取りまとめを行いたい。配付されている資料「母子里地区の将来に向けて（中間まとめ）案」については、事務局でまとめたものであるが、これまでの議論の結果や住民の方々からのご意見などがしっかりと盛り込まれている。今後、取組を進めるに当たっては、町のサポートが必要であることから、

本日の会議で取りまとめた結果については、4月ごろになるかと思うが、後日、私が本会を代表して、町長に直接お会いして説明したいと考えている。その際には、道及び町の関係者の方々にもご同席いただくなど、ご協力をお願いしたい。

## 2 議事

### (1) 母子里地区の将来に向けて

※西田主幹より、資料に沿って説明

#### <意見交換>

#### ◆母子里地区の概要、母子里地区の課題

**多田会長**：資料の項目に沿って、意見交換を進めていきたい。まず、1の母子里地区の概要、2の母子里地区の課題について、事実関係の相違や、4ページの朱書き部分の修正箇所などを中心に、皆様から何かご意見があればお受けしたい。

**多田会長**：私のほうから、話題をひとつ提供する。先日、町の第7次振興計画の関係で地域懇談会が開催され、15人が3班に分かれ、それぞれ意見交換を行った。会議の中で、一人暮らしの高齢者の方とお話をする機会があり、買い物についてどう思っているかお聞きしたところ、移動販売やトドックもあり、あまり困っていない様子であった。フカイチフーズの移動販売も、個人からの依頼があれば、各戸の玄関まで商品を届けてくれるようである。ただ、バスの問題については、名寄市立病院への通院の際の受付時間に間に合うようにバス時刻を変更してもらいたいといった声が多かったように思う。また、バス料金の割引については、手続きのため朱鞠内まで出向く必要があり、そのためのバス賃が1,000円もかかってしまうので本末転倒であり、交通手段を持たない高齢者の方への配慮が必要である。買い物の問題よりも、むしろ、交通手段の確保といった問題のほうが深刻であるように思われる。

**橋本委員**：同感である。名寄市立病院への通院に当たっては、病院側も母子里地区の交通事情を理解し、受付時間の延長など配慮してくれているが、バス時刻の改善が図られれば、通院に合わせて買い物の時間もとれるので、根本的な解決が必要である。

**多田会長**：資料の1の母子里地区の概要、2の母子里地区の課題について、各委員の皆様にご異議なければ、この内容でまとめたいがよろしいか。

※異議なし

#### ◆将来に向けて母子里地区の「めざす姿」

**多田会長：**次に、3の将来に向けて母子里地区のめざす姿について、意見交換を進めていきたい。これまでの議論では、住民同士の支え合いや助け合いが必要ではないかといったご意見や、現在のような静かな暮らしを続けたいといったご意見のほか、この母子里地区で暮らしてみたいと考えている方がいれば、こうした移住希望者を前向きに受け入れていくといったご意見などがあった。この辺のところを念頭に入れながら、たたき台として2点ほどにまとめている。少し抽象的な感じもするが、おおむね各委員の皆様のご意見が反映されているかと思うがどうか。

**橋本委員：**確かに抽象的ではあるが、具体的な取組内容などは後段に盛り込んでおり、協議会でのこれまでの議論なども網羅されているので、この程度の内容でよろしいかと思う。余談になるが、先ほどの高齢者の方の買い物やバスの問題についてであるが、私のほうでも、会合の際など、何らかの機会を通じて、高齢者の方どのように考えているのかきちんと話を聞いてみたい。実際のところ、移動販売や宅配サービスなどもあるので、日々の買い物はあまり困っていないように思われるので、買い物を楽しむといった視点で買い物ツアーなどに取り組んだ場合、どの程度の高齢者の方が希望するのか聞いてみないとわからない。

**多田会長：**高齢者の方の買い物の問題であるが、この点について、よるべさの蔵前代表はどのようにお考えか。

**蔵前代表：**施設の利用者など、買い物や食事のために外へ出かけることは非常に良いことである。気の合う仲間同士で出かけることの楽しさだけでなく、訪問先での人とのふれ合いも大切で、実際に買い物をしないとしても、いつもの環境とは異なる場所へ出かけていくことが大事である。一緒に出かける職員も含め、良い気分転換になる。

**日野委員：**高齢者の方への支援については、買い物支援を含め、各種イベントの開催など、現在もよるべさで色々と活動されているが、今後もしっかりとしたサポートをお願いしたい。ただ、先ほども話題に出ていたが、高齢者の方のニーズがどの程度あるのか、私も気になるところ。

**若山委員：**現在、よるべさでは車輛は持っているのか。

**蔵前代表：**車いすが乗せられる車輛1台を含め2台あるが、いずれもワンボックスカーではなく比較的小さい。買い物などの移送サービスは、当法人の施設利用者に対して特に料金を徴収していないが、社会福祉協議会で実施しているサービスでは、町内は一律300円で、町外への移送は利用時間などで料金が異なる。

**多田会長**：資料の3の将来に向けて母子里地区のめざす姿について、各委員の皆様にご異議なければ、この内容でまとめたいがよろしいか。

※異議なし

#### ◆母子里地区の将来に向けた今後の取組の方向性

**多田会長**：次に、4の母子里地区の将来に向けた今後の取組の方向性について、意見交換を進めていきたい。これまでの議論を少し整理し、地域コミュニティの維持といった点のほか、高齢者支援、産業・ビジネスなど、3点ほどの項目でまとめている。まず、地域おこし協力隊や移住者の受け入れといった点で、ご意見などがあればお受けしたい。

**小野田委員**：地域おこし協力隊の受け入れに関しては、複数名の配置がよろしいかと思われる。初めての土地に馴染むまでにある程度の時間を要することを考えると一人では地域で孤立してしまうことも考えられるので、複数名の配置が望ましい。

**若山委員**：地域おこし協力隊を受け入れるとした場合の業務エリアについてであるが、他の地域などを見ても、特定の地域での活動に限定せず、町全域で活動しているケースが一般的である。母子里地区という小さな地域に限定した活動となると、担うべき仕事もかなり限られるのではないか。活動するための費用なども気になるところ。

**小野田委員**：費用の面では、隊員の人件費や活動費など必要な経費について、国から特別交付税により措置される。若山委員からお話のあった活動エリアの問題であるが、町全域の広いエリアで活動するのが良いのか、一つの地域にスポットを当てて集中的に活動するのが良いのか、判断の分かれるところである。ただ、そのどちらかが正しいといったことではなく、正解は一つではないと考える。

**大野准教授**：他地域での地域おこし協力隊員の取組について何点か紹介する。まず、音威子府村の取組であるが、この隊員は、本州から音威子府美術工芸高校に入学したことを契機として、地域おこし協力隊として村に残り、村の施設である「木遊館」で木工デザインなどを中心に、音威子府村の木工芸術文化活動の普及のために村全域で活動している。もう一つは、天塩町の取組で、幻の魚といわれる「イトウ」の釣りのガイドとして「天塩川下流部博士」と名乗れるようになるまで地域に定着している。最後に、島根県浜田市弥栄自治区の事例であるが、この浜田市では、集落支援員や地域おこし協力隊を弥栄自治区に限定して配置しており、地域でネックとなっている課題や問題などを各方面に繋いでいくキーパーソンとしての役割をはじめ、自治区の会計など事務的な役割、イベントなどの活動の火付け役としての役割、さらには集落の活性化に必要な人材や情報などを外部から

取り入れる役割などを担っている。地域おこし協力隊の活動エリアや活動内容は千差万別であり、様々であることから、それぞれの地域にあった形で受け入れていくことが大切である。また、小野田委員からもお話があったが、配置人数は一人よりも複数名のほうが良いように思う。

**西田主幹**：地域おこし協力隊の活動エリアであるが、一定の地域に限定して活動している事例は結構ある。身近なところでは、下川町の一の橋地区での取組などがそうである。

**多田会長**：いずれにしても、これまでの協議会でも議論のあったところであるが、地域おこし協力隊の受け入れに当たっては、この母子里地区に将来的に定着してもらうことが重要である。そのためには、国の財政措置が受けられる3年間の期間内に、この地で仕事を見つけることが大切で、こうした点を踏まえ、この母子里地区での資源を活かし、すぐにでも取り組みそうな仕事としては、まずは山菜が考えられるので、これを上手く活用できれば、ひと夏くらいは暮らせる。

**小野田委員**：地域おこし協力隊の活動エリア、活動内容の話に戻る。先ほど、若山委員から、母子里地区という小さな地域に限定した活動となると、担うべき仕事もかなり限られるのではないかとのお話があったが、そういった点も確かに危惧される場所であるが、一方で、多田会長のお話にもあったとおり、母子里地区での定住に向けて、この地で暮らしていくための仕事を、自ら生み出していくことも非常に重要なことである。そのためには、あまり仕事を増やさず、時間的な余裕を持ってもらうためにも、活動エリアをこの母子里地区に限定するのも良い。

**若山委員**：地域おこし協力隊の受け入れに当たっては、それぞれの自治体の考え方によると思うが、活動エリアや活動内容などがきちんと整理されていないと、結局何も仕事が無いといった状況に陥ってしまう自治体も少なくない。最大3年間という限られた期間の中で、定住するための仕事を探すとしても、何も無い中ではなかなか難しいので、何か目標のようなものを与える必要がある。例えば、先ほどの山菜でも良いので、きっかけのようなものを与えてあげて、その後、自らで仕事を見つけていくといったような流れが良い。

**多田会長**：この地域を良くするためには外部の力が必要であり、そのために地域おこし協力隊を受け入れていくといった点では、各委員の意見が一致しているかと思う。その上で、この地域への定住を考えた場合、何か仕事を作っていく必要があり、その核となるのが、これまでの議論では、地域の資源である山菜を有効活用したビジネス化の取組である。この後の5の具体的な取組の中でも、引き続き議論を重ねていきたいが、4の母子里地区の将来に向けた今後の取組の方向性について、各委員の皆様にご異議なければ、この内容でまとめたいがよろしいか。

**橋本委員**：移住者の受け入れに関して、退職された方などに来ていただけると、自治区の活動などもお願いできるのでありがたい。また、退職された方は、仕事も無く身軽であり、移住する際のハードルも低いので、より現実的である。

※橋本委員からの修正意見を受け表現を一部修正し、その他は異議なし

#### ◆母子里地区の将来に向けた具体的な取組

##### (1) 優先度の高い当面の取組

**多田会長**：次に、5の母子里地区の将来に向けた具体的な取組についてであるが、先ほどのめざす姿や取組の方向性などを念頭に置きながら、これまでの議論を踏まえてまとめたもの。これは、来年度以降の具体的な取組にも繋がってくるので、少し時間をかけて意見交換していきたい。まず、優先度の高い当面の取組として、①の自治区活動の今後のあり方についての検討であるが、除雪や水道などの管理についてご意見などがあればお受けしたい。

**橋本委員**：除雪や水道の管理などの自治区の仕事は、既に担い手が不足している状況であり、退職された方などの移住者を受け入れ、こうした方々に自治区の仕事を担当してもらうことを真剣に考えていく必要がある。除雪のオペレーターなどはかなり深刻な問題である。

**若山委員**：除雪や水道の管理についてであるが、担い手が不足していることに議論が集中しがちである。むしろ、これまでの管理の方法を見直すことも考えていく必要がある。水道の管理で言えば、それほど大量の水道水を使うこともないので、昔ほど管理が大変では無くなってきている。除雪についても、オペレーターが少ないので、連日の作業となり相当きついが、除雪箇所を減らしたり、分担するなどの工夫により、かなり軽減されると思われる。この地区に人がいない現実を率直に受けとめた上で、従来のやり方を見直すことにより、現在の人たちだけでも、何とかやっていける方法もあるように思う。

**小野田委員**：除雪や水道の管理については、これまでの経緯もあり難しい部分もある。この点は、移住者や地域おこし協力隊などが入ってくれば、事情も変わってくるので、現時点ではこの問題があるということ、住民の方々が共通して認識しておく程度で留めておいてはいかがか。

**多田会長**：次に、②の大学やNPOとの連携についてであるが、本日は旭川大学の犬野准教授とよるべさの蔵前代表にお越しいただいているので、お二方よりご発言をお願いしたい。

**大野准教授**：現在、旭川大学では、地域をフィールドとした学びのカリキュラムを導入し取り組んでいる。「コミュニティ調査実習」という科目であるが、学生が地域に実際に入って生活実態調査を体験し、その後、地域福祉の実践に活かしていこうとするもので、平成25年度は音威子府村で取り組んだところであるが、この母子里地区でも、秋の収穫祭での住民の方々と学生との交流や、実際に高齢者宅への訪問なども行っており、平成26年度は母子里地区でも取り組みたいと考えている。具体的には、秋の収穫祭をはじめ、天使の囁きなど各種イベントへの参画のほか、屋根の雪下ろしなど冬の除雪体験、福祉や看護の関係では、よるべさとの連携による体験学習なども盛り込みたいと考えており、大学として所要の予算を準備しているので、本協議会の各委員の皆様をはじめ、関係各所のご協力を是非お願いしたい。

**蔵前代表**：先ほど話題に出ていた移送サービスについてであるが、実施に当たっては講習を受ける必要がある。当法人としても、できるだけ協力していきたいと考えているが、現在のスタッフ体制ではなかなか難しい状況であり、その中で、先ほど大野先生よりお話のあった旭川大学の学生の体験学習などの取組は大変ありがたい。そうした取組を通じて、当法人のスタッフとして働いてもらえる学生の方が何名かでも現れれば、当法人の今後の活動にも拡がりが出てくる。

**大野准教授**：先ほど申し上げた「地域をフィールドにした学習」を経験することで、この母子里地区で暮らしてみたいと考える学生も何名かでてくる可能性もあると思うので、よるべさでのインターンシップ制度などを効果的に活用しながら、この地区での暮らしを体験してもらうのは非常に良い試みと考えている。

**若山委員**：旭川大学との連携といった点で考えると、女子学生が多いので、女性が単身でも地域おこし協力隊として参加できる仕組みを考えてみてはどうか。例えば、都会では菜園付き住宅というのが流行っていて、この母子里地区で自宅の菜園で野菜を作って生活していくといったことは、単身の女性でも可能である。山菜採りでも、除雪でも、男性でなければダメといったものではない。具体的な形になるかどうかは別として、女性の力を上手く活用していくことも検討材料の一つとしてあっても良いと思う。

**大野准教授**：本校の栄養学科では、山菜を使ったレシピの研究なども行っているので、色々アドバイスできる部分もあると思う。こうしたノウハウなども上手く絡めながら、取組を進めていくのもよろしいかと思う。

**若山委員**：他の地域では、「愛妻クラブ」といった取組があって、自宅で作った食材や料理などを道の駅などで販売している事例もある。まずはこういった小さな取組から始めて、ある程度の販売が見込める段階で徐々に拡大していくほうが良い。

**大野准教授**：本校には農産加工の専門家もいるので、山菜の加工やブランド化などで技術的な部分ではアドバイスできると思う。

**若山委員**：山菜などを自分で加工できる加工場が町にあるが、こういった施設か。

**小野田委員**：自家用などの食品加工のために活用できる加工場であり、基本的に商用では使用できない。使用料金を払って、自家用あるいは試験加工などのため、大釜や皮むき機などの機材を安価で利用できるというもので、例えば、JAの女性部などが、農産物などの商品開発のために活用する機会が多い。その際の試験販売までは許されているが、その後の本格的な販売の段階になると自ら加工施設を準備する必要がある。加工施設の初期投資については町の補助制度を活用できる。

**多田会長**：山菜加工施設については、規模にもよるが、既存施設の改修などに国の交付金（過疎集落等自立再生対策事業）などが活用できるとのことなので、事業の説明を事務局よりお願いしたい。

※西田主幹より、過疎集落等自立再生対策事業の概要を説明

**多田会長**：この事業では、既存施設の軽微な改修のほか、例えば、各種イベントの開催や地域資源の発掘など、様々なソフト事業にも幅広く使えるとのこと。交付金は町から申請することとなるので、関係部署とも相談しながら、活用する方向で検討していきたい。

**若山委員**：取組を具体的に進める際には、地域おこし協力隊が中心になると思うが、山菜加工を含め、地域おこし協力隊に取り組んでもらうには、時間的にもかなり厳しいと考えるがどうか。むしろ、今すぐにでも実現できそうなことに取り組むべきである。具体的には、現在、漁業を営んでおられる方が後継者を捜しているの、これは確実に収入を得ることもでき、将来的には居抜きで継承することも考えられる。

**小野田委員**：若山委員のお話を含め、山菜加工の取組と同時並行で進めていくことも可能であると思う。

**橋本委員**：この母子里地区では、「イトウ」が有名なので、淡水魚の水族館なども良いのではないかと。留辺蘂の山の水族館などもブームとなっている。通り過ぎるだけの観光客も足を止めるのではないかと。

**多田会長**：施設の的にも相当規模が大きいものとなり、現実的には難しいのではないかと。冬の暖房費など維持費も相当かかる。



**若山委員**：行政が実施するものではないので、ビジネス化として取り組んでいくのであれば、採算性を十分に考えていく必要がある。見学施設なので一過性のものとなり、ビジネスとして成立するのはかなり難しいのではないかと。

**多田会長**：この辺で少しまとめたい。ただ今の議論では、②の大学やNPOとの連携、③の高齢者の支援、④の地域資源を活用したビジネス化について、一連の流れの中で色々ご意見があったところであるが、具体的な内容については、今後協議していくこととして、概ねのところは、資料のとおりで特に問題がないと思われるがどうか。また、次の⑤の地域コミュニティの活性化では、これまでの協議会でも話題に上がっていた家庭菜園で収穫された野菜の直売についてであるが、実施方法などを若干工夫する必要があるものの実現性の高い取組であると考えている。⑥の地域おこし協力隊や移住者の受け入れについても先ほどからの議論の延長でもあるが、定住に向けた仕事の面では、山菜や漁業などをきっかけとしながら、新たな仕事の場となるよう取り組んでいくことが選択肢として挙げられたほか、母子里地区の魅力発信といった面では、ホームページ等を上手く活用しながら対外的にPRをしていくことも必要であるので、これについても今後検討していきたい。資料の①から⑥までで、皆様から特にご意見などがなければこのようにまとめたいがいかがか。

※異議なし

## (2) 今後検討を必要とする取組

**多田会長**：最後に、(2)の今後検討を必要とする取組について意見交換を進めていきたいが、まず、①の住民同士が気軽に助け合える仕組みづくりの検討については、率直なところ、現在、母子里地区に住んでいる住民の年齢構成や人数から考えて、支える側と支えられる側が偏ってしまいがちになり、双方向に支え合う仕組みはなかなか難しい。例えば、高齢者の方などは金銭的にも生活が大変な方もいるので、昔あった生活改善運動のように香典を廃止するであるとか、小さなことから始めて、地域全体で支え合える仕組みを考えていく必要があると思う。次の②の高齢者支援に関する取組としては、多目的集合コミュニティ住宅や老人介護施設などについて検討のほか、空き家についての検討などを挙げているが、多目的集合コミュニティ住宅などの施設整備は、高齢者の方がどのように考えているのかをきちんと把握する必要があるが、あまり乗り気でない方が多いように思う。

**橋本委員**：近所づきあいをするにしても、家が離れているとなかなか難しい。近くに住んでいると、買い物に誘う場合など連絡がスムーズに運び非常に良い。高齢者の方が多いので、見守りなどの効果も高いほか、冬期間の除雪でも重機の燃料代などが相当かかっているの、1箇所集まって住むことの効果はかなり高い。

**若山委員**：現在、自宅に住んでいる方がほとんどなので、正直なところ、気ままに暮らしたいと考えている方が多いのではないかと。密集したところに住んでしまうとせっかくの田舎暮らしの良さが台無しになってしまうような感じがする。

**日野委員**：1戸当たりの敷地面積を大きくとれるのはこの母子里地区の利点でもある。夏は本当に過ごしやすいで、外国のクラインガルテンのように、家の前に大きな菜園を持って、夏の期間だけでも避暑地として提供する取組もおもしろい。

**若山委員**：理想ではあるが、そこまで大きな取組となると事業規模も大きくなり、現実的ではない。私の考えはもっとシンプルで、田舎暮らしをしたい人が自由気ままに暮らせるような形が望ましい。

**小野田委員**：高齢者支援の関連では、居宅介護などの面で、現在、よるべさが精力的に活動されているので、多目的集合コミュニティ住宅などの新たな施設の建設は、費用対効果などを考慮すると現実的にはかなり難しいかと考える。

**日野委員**：まずは、このコミュニティセンターがあるので、これを上手く活用していくことが重要であり、よるべさなども、このコミュニティセンターを中心にもっと精力的に活動していただき、この地域のコミュニティをしっかりと維持していくことが大切である。

**若山委員**：取組やすいところから始める必要がある。新たな施設を建設するよりも、むしろ、空き家を有効に活用した取組が急務であると考え。既に空き家になりそうな家屋もあるので、そうなる前に、町が主体となって各戸の意向をしっかりと聞いておく必要があるのではないかと。その上で空き家となるのであれば、撤去せず、それを何らかの方法で取得するなどして、必要な改修を加え、移住者などに提供していくことも良いかと思う。

**西田主幹**：空き家の検討については、資料では、高齢者支援に関する取組のひとつとして整理しているが、先ほどからのお話では、移住者向けの住宅として整備していくという流れであり、その下にある町に対する要望の項目と重なる部分があるので、一連の取組として考えていくほうが良いのではないかと。

**多田会長**：このほかのご意見等はないか。北大の機能移転や企業誘致などの検討については、これまでの議論を踏まえ、町に対して要望していくこととしたい。

**日野委員**：北大の機能移転や企業誘致に関しては、過去に陳情した経緯もあるので、中長期的にも必要な施策であることから、町にも、是非、検討をお願いしたい。

**多田会長**：色々のご意見をいただいたところであるが、(2)の今後検討を必要とする取組については、多目的集合コミュニティ住宅に関する項目をはずし、空き家の検討について、町に対する要望項目の一つとして加えることとしたいがいかがか。

※異議なし

**多田会長**：議論の尽きないところであるが、この辺で会議を終了したい。本日の議論の結果を踏まえ、修正すべき点などを事務局で再度整理していただき、本協議会における本年度の中間まとめとする。この内容については、冒頭でもお話したとおり、4月上旬を目途に町長に説明したいと考えているので、事務局で日程調整などをお願いしたい。この中間まとめをベースとして、4月からは、具体的な取組を進めていくこととなるので、各委員の皆様におかれては、引き続きご協力をお願いします。この一年間のご協力に感謝申し上げ、本日の会議はこれで終了する。

～ 閉 会 ～